

「エルトゥールル号の遭難」の話に学ぶ

勇気・思いやり・恩返し……



先週の道徳で「エルトゥールル号の遭難」の話を紹介し、その後、みなさんに感想を書いてもらいました。

「エルトゥールル号の遭難」とは、次のような話です。

1890（明治23）年9月16日夜、トルコの軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本町沖で暴風雨に遭い座礁し、587名が死亡。生存者69名という大惨事起きた。この暴風雨のなか、地元民（大島の人たち）は懸命な救助を行い、介護し、亡くなった人々は丁重に葬られた。生存者は、明治天皇の命により、日本の軍艦2隻でトルコに送り届けられた。

この事件に同情した山田寅次郎という民間人は、遭難者支援の援助をするため、全国を歩き回り義捐金を集めトルコに渡った。トルコ側はとも感激し皇帝自ら寅次郎に会った。寅次郎はトルコからの要請により、トルコにとどまり日本語の教師になる。この教え子の中には、将来の初代トルコ大統領で「建国の父」と呼ばれるケマル・アタテュルクがいた。アタテュルクは、一連の日本と明治天皇の行いに感動し、机の上に尊敬する明治天皇の肖像を置いていたというエピソードがある。

>>>この話の思いがけない後日談

1985年3月17日。イラン・イラク戦争の最中、イラクのサダム・フセイン大統領が

「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶ飛行機があればそれを打ち落とす」と発表した。日本人は、イランに仕事に来ている人が大勢いたので驚き、すぐさま空港に向かい脱出を図ったが、各国の飛行機会社は自国民を優先し、日本人は乗れなかった。さらに他国政府は救援の飛行機も出したが、日本は対応が遅く安全も確保できないとして救援機を飛ばすことができなかった。日本人は窮地に陥った。その時、なんとトルコの飛行機がやってきたのだ。そして日本人215名全員を乗せてイランから飛び立ってくれたのだ。タイムリミットの1時間15分前のことだった。



この救出を、当時の日本の人たちは心から感謝しつつも、なぜトルコの人たちが危険を冒してまでも日本のためにしてくれたのかわからなかった。

この時、前・駐日トルコ大使 ネジャッティ・ウトカン氏は次のように語っている。

「エルトゥールル号の事故に際し、大島の人たちや日本人がなしてくださった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていません。私も小学生のころ、歴史教科書で学びました。

トルコでは、子どもたちさえ、エルトゥールル号のことを知っています。

今の日本人が知らないだけです。それで、テヘランで困っている日本人を助けようと、トルコ航空機が飛んだのです。」

・・・その後

1999年にトルコ地震があった際、助けられた日本の企業の人々は、この恩は忘れてはいけないと義捐金を集め、トルコに寄付したのだった。

<この話から学んだり、感じたいしたこと>

みなさんが丁寧に書いてくれた感想のほんの一部ですが紹介します。

とても感動しました。いちばん感じたのは、言葉や国が違って人も思いやる心は同じということです。

地元民が懸命な救助をしたことは勇気ある行いだと思います。自分を犠牲にしてまで一生懸命やることは、とても勇気が必要だと思います。

トルコは、100年も前のエルトゥールル号の恩を忘れずに助けてくれた。日本人は本当に助かった。100年も前のことが返ってきたなんてすごいと思う。

良いことをすると、それは返ってくるものだと思う。多分、この先もずっと日本とトルコは助け合っていくのだと思う。

この話をもっと多くの人に知ってもらいたと思いました。日本とトルコ、距離はとても遠いけれど、心と心はつながっている素敵な関係だと思いました。

こういった恩を忘れない関係があちこちであるといいなと思います。エルトゥールル号の遭難救助にかかわった人たちは勇敢だと思うし、日本人としてとても誇りに思いました。

私自身がこの話を知ったのは数年前です。とても感動し、生徒に教えてあげたいとずっと思っていました。初めて道德の授業で取り上げてみましたが、いかがだったでしょう。資料を大切に保管し、読み返し、他の人にも話してくれるとうれしいです。